平城宮若犬養門付近出土の小札甲

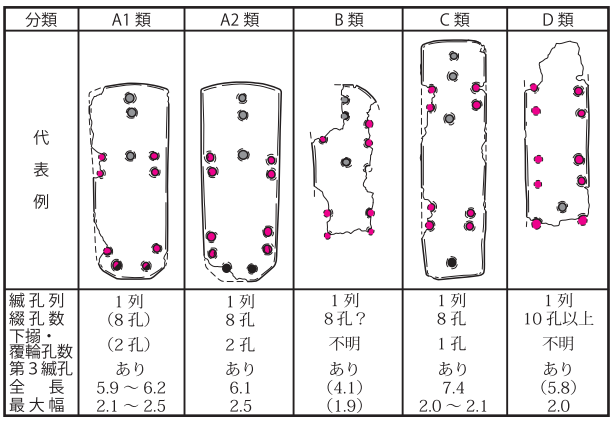
はじめに　第133次調査の際に平城宮南面西門（若犬養門、SB10200）付近から出土した鉄製小札は、都城中枢における数少ない出土事例ということもあって、これまで奈良時代初めの基準資料として注目されてきた（津野1998など）。しかしながら『1981 平城概報』には「挂甲小札」が出土したという記述があるのみで、これまでその全貌はあきらかでなかった。このたび、2012年度飛鳥資料館春季特別展「比羅夫がゆく―飛鳥時代の武器・武具・いくさ」への出陳を機に、整理の機会を得たのでここに報告する。

出土状況　小札は、平城宮内の池状遺構SG10240から若犬養門の西を南流する南北溝SD10250と、宮南辺二条大路北側溝SD1250が合流する地点の溝埋土最下層から、折り重なった状態で一括して出土した。SD1250からは藤原宮式の瓦や平城宮Ⅲ・Ⅳの土器、神亀３年（726）から神護景雲年間（767～770）までの紀年木簡など、多様な遺物が出土している。

資料の概要　細片を含めて整理した結果、25枚を図化しえた（図83）。平面形態と孔の配置などにもとづいてＡ～Ｄ類に分類する（図82）。詳細は表15を参照されたい。

Ａ類は上広下狭形で、もっとも多く16枚を数える。札頭は扁円頭形をなし、札足は隅切を呈する。孔の配置によって細分することができ、第２綴孔の下段２孔を綴・下搦兼用孔とする（初村武寛氏のご教示による）Ａ１類と、第２綴孔とは別の下搦孔を２孔穿けるＡ２類がある。このほかに４はＡ１類とほぼ同じであるが、第３縅孔の下にもう１孔穿ける。覆輪孔か。Ｂ類は、札頭が円頭形を呈するもので、14がこれにあたる。Ｃ類は細長方形で、７枚を数える。札足側中央に１孔を穿け、覆輪孔としている。12のみ第２綴孔左側を３孔穿ける。穿け損じか。Ｄ類は札幅はＣ類と似るが、孔の配置はまったく異なる。２－bがこれにあたる。

小札の遺存状態は比較的良好で、裏面にキメ（1－c、４～９）や表側からの穿孔によるバリ孔（1－f、10～14）を確認できる資料もある。残念ながら革紐や組紐などの有機質はほとんど残っていないが、いくつかの資料には小札同士を綴じあわせた痕跡や、綴紐や縅紐らしき痕跡が認められ、未製品とは考えにくい。ただし、異なる形態の小札６枚が向きを違えて銹着している１をみればわかるように、小札甲は少なくとも廃棄時にはばらばらに解体され、甲としての機能を喪失していたものとみられる。



＊単位はcm。（　）は残存値。●：縅孔　●：綴孔　●：下搦・覆輪孔

図82　小札型式分類

表15　小札計測値一覧

番号	分類	札丈	札幅
1-a	A2	6.1	2.5
1-b	C	(6.7)	2.1
1-c	A	－	－
1-d	A	6.0	2.5
1-e	A	6.2	2.5
1-f	C	7.4	2.1
2-a	A1	(5.4)	2.1
2-b	D	(5.8)	2.0
3-a	A	(5.1)	2.3
3-b	C	(5.4)	2.0
4	A	6.1	2.4
5	A1	6.0	2.4
6	A1	6.1	2.5
7	A1	6.3	2.5
8	A1	5.9	2.5
9	A	(5.5)	2.1
10	A	(5.2)	2.2
11	C	7.4	2.0
12	C	(7.4)	2.1
13	C	(6.2)	2.1
14	B	(4.1)	(1.9)
15	A?	(2.6)	(2.3)
16	A?	(3.7)	(1.8)
17	A?	(1.7)	(1.2)
18	C?	(2.2)	(1.9)

＊単位はcm。（　）は残存値。

なお、本例は津野仁氏によって「薄い漆が小札の短軸半分にみられ、金漆塗りの可能性」（津野2010、132頁）が指摘されていた。そのためいくつかの資料について資料を採取し、赤外線分光分析（FT-IR）をおこなったものの（赤田昌倫による）、コシアブラなどの塗布を確認することはできなかった。

位置づけ　形態は多様であるが、いずれも縅孔１列で第３縅孔をもち、札幅も2.0～2.5cmにおさまるという共通点をもっている。SD1250からは奈良時代後半の土器や紀年木簡も出土しているが、７世紀から８世紀中頃にかけて札幅が徐々に細くなるという津野氏の研究成果を参考にすれば（津野1998）、天平21年（749）から天平宝字４年（760）の間に埋納されたとみられる東大寺金堂須弥壇出土品の札幅0.8～1.2cmよりも太い本例の製作時期は、奈良時代前半におさまるとみて大過ないだろう。

おわりに　ここまで若犬養門付近出土小札甲について基

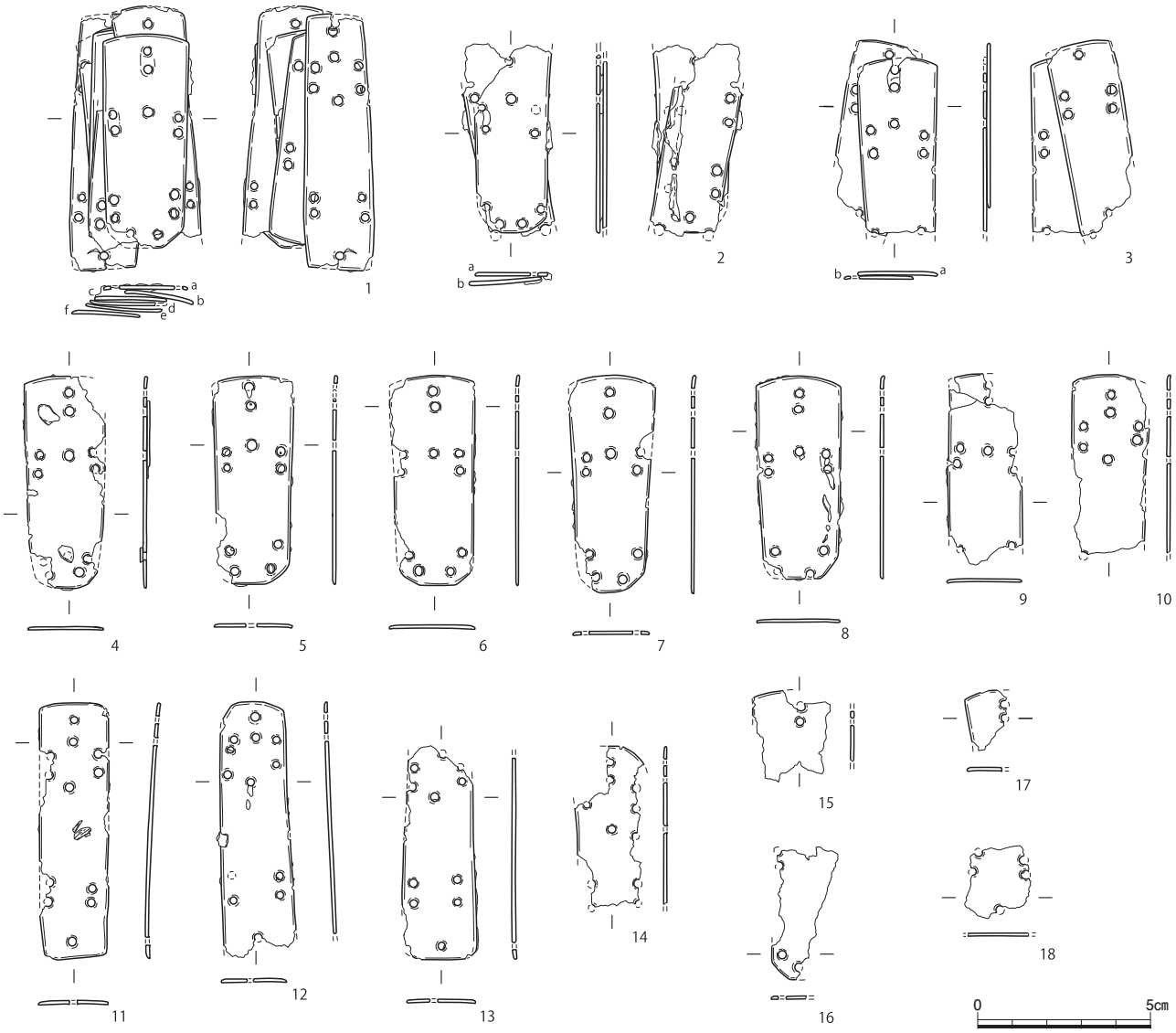


図83　小札実測図　1：2

礎的な整理を試みた。本稿がまだ実態のあきらかでない奈良時代武具研究の一助となれば幸いである。

なお小札の出土したSD1250からは衛士関係の木簡が集中して出土しており、この付近に衛士の勤務地があったと推定されている（鬼頭1983）。本例についても「宮城の警備にあたる衛士が、警備のために着用した甲の一部である可能性」（津野1998、86頁）が指摘されてきたところである。しかし今回の整理の結果、小札甲は溝に廃棄された時点ですでにばらばらに解体された状態であったことがあきらかとなった。使用に耐えなくなった小札甲をばらして廃棄した可能性ももちろんあるが、小札の中には十分再利用に耐えうるものも含まれている点が留意される。似たような出土状況は最近、長岡宮でも確認されており、塚本敏夫氏らは小札を用いた祭祀がおこなわれたとみる（塚本ほか2012）。SD1250からは人形や斎串など祭祀に関わる遺物も出土していることをふまえると、本例についても、あるいはそのような観点で考える必要があるのかもしれない。

（諫早直人）

謝辞

報告にあたっては小村眞理氏、塚本敏夫氏、津野仁氏、初村武寛氏に大変お世話になりました。記して感謝いたします。

参考文献

鬼頭清明「平城宮出土の衛士関係木簡について」『木簡研究』第５号、1983。

塚本敏夫・山田卓司・初村武寛「長岡京出土小札の再検討」『都城』23、（財）向日市埋蔵文化財センター、2012。

津野仁「東大寺出土甲と古代小札甲の諸要素」『研究紀要』第６号、（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター、1998。

津野仁「長岡宮跡出土の小札甲」『向日市埋蔵文化財調査報告書』第84集、向日市教育委員会、2010。

「南面正門（若犬養門）の調査（第133次）」『1981平城概報』。